

## 数量詞表現「NQC型」における集合と分配について

林 佩芬

### 1. はじめに

数や量に言及した表現として、日本語では、例えば、豚を数えるとき「1匹」、「2匹」、「3匹」のように、数字「1」、「2」、「3」の後に「匹」という助数詞(類別詞)をつける。本稿では、「1匹」、「2匹」、「3匹」のように「数詞+助数詞」の形を取るものを「数量詞」、数量詞とそれに対応する名詞が含まれた句や文を「数量詞表現」と呼ぶこととする。

奥津(1983)は、日本語の数量詞表現について、次の3つの型をあげている。

- (1) a. 昔ある所に3匹の仔豚が住んでいました。 (QのNC型)
  - b. 昔ある所に仔豚が3匹住んでいました。 (NCQ型)
  - c. 昔ある所に仔豚3匹が住んでいました。 (NQC型)
- (奥津1983: 1)

(1)において数量詞をQ(= quantifier)、名詞をN(= noun)、格助詞をC(= case)とすると、(1a)は「QのNC型」、(1b)は「NCQ型」、(1c)は「NQC型」と表示することができる。(1)における3つの数量詞表現は、その意味の違いを説明することは難しい。しかし、表現形式の違いは必ず何かの意味や機能の違いを提示していると考えられるため、この3つの型は、事物を数えるときの捉え方に違いのあることが考えられる。

この点につき、この捉え方の相違からの分析として、「集合」と「分配」という視点ももちいられてきた。そして、この視点から、「NQC型」は「分配的」な解釈が不可能であって、「集合的」な解釈しか存在しないとされてきた。具体的には、「男3人が酒を3本飲んだ」という「NQC型」の例文では、男3人で飲んだ酒の総数は3本という集合的な解釈がなされてきた。

たしかに、本稿も、「集合」と「分配」という視点で数量詞表現を分析することは

林 佩芬

有意義であると考え。しかし、「NQC型」は、「分配的」な解釈が不可能であって、「集合的」な解釈しか存在しないという主張については疑問があり、「NQC型」は「集合的」、「分配的」のいずれの性質をも有すると考える。この点につき、先の例文では、飲んだ酒の総数3本という集合的な解釈と飲んだ酒の総数は9本という分配的な解釈のいずれもが可能である。また、その他にも、分配的な解釈が可能な表現例も存在する。例えば、「この女ふたりが拳銃を構えて対峙した」という例文は、ふたりの女がふたりで一丁の拳銃を持つことではなく、ふたりの女がそれぞれ一丁の拳銃を持つことであるため分配的である。また、「登山者3人がテントを張った」という例文は、3人がひとつのテントを張ったという解釈以外に、3人がそれぞれひとつのテントを張って、全部で3つを張ったという分配的な解釈も可能と考える。このように、「NQC型」には「集合的」な性質と「分配的」な性質のあることが考えられる。

そこで、本稿は、数量詞表現における3つの型の相違点を分析する作業の第一歩として、「NQC型」の本質を明らかにすべく、「集合的」な解釈を導きやすい要因と「分散的」な解釈を導きやすい要因を考察し、「NQC型」が「集合的」な性質と「分配的」な性質を有することを明らかにする。

## 2. 先行研究

従来、数量詞表現の意味については「QのNC型」と「NCQ型」の違いについては多く論じられてきたが、「NQC型」についてはほとんど論じられてこなかった。ただ、川添(1996)は意味的な観点から、宇都宮(1995、2001)は機能的な観点から、「NQC型」も視野に入れて、3つの型を比較している。そこでの見解をまとめると、「QのNC型」は「集合的」な性質と「分配的」な性質の両方を有するものとして、また、「NCQ型」は「集合的」な解釈ができない「分配的」な性質を有するものとして、そして、「NQC型」は「分配的」な解釈ができない「集合的」な性質を有するものとして説明されてきた。この点について、まず、川添(1996)の見解をみていく。

- (2) a. 2人の友人が子供を1人産んでいる。
- b. 友人が2人、子供を1人産んでいる。

- c. \* 友人2人が子供を1人産んでいる。 (川添1996: 57)

川添(1996)は、(2c)は非文であると判断している。「子供を産む」というのは、1人でしかできないことであるので、主語の名詞句は分配的な解釈しか成立しない。川添は、(2c)が容認不可能になるということは、「NQC型」が分配的には解釈できないことを主張している。しかし、この非文と判断される(2c)のような表現は、以下のような文脈を与えると、自然に成立する。

(3) 【場面：H病院でBさんの妊婦の友人2人が出産した場合】

Aさん： ねえねえ、聞いた？H病院の看護婦さんの不注意で、出産の事故が起こったんだって・・・。

Bさん： 聞いた、聞いた。あれって本当にひどいよね。でも、私の友人2人があそこで子供を産んでいたけど、とくに問題がなかったって言ってたよ。 (作例)

(2c)と(3)が「成立する」と判断されるということは、「NQC型」も「分配的」な解釈が存在することになる。

### 3 . 集合と分配

川添(1996)は「集合的」な解釈と「分配的」な解釈について、1)集合的な解釈は述語が名詞句によってあらわされる複数のものの集合全体について何かを述べていると解釈される場合といい、2)分配的な解釈は複数のもの(の集合)を表す名詞句が主語(または目的語)にあって、述語がその名詞句によって表される複数のものの中の各個体について何かを述べていると解釈される場合と述べている。次の例文は「集合」と「分配」に関する従来解釈である。

- (4) a. 3人の学生が本を3冊買った。  
b. 学生が3人、本を3冊買った。  
c. 学生3人が本を3冊買った。 (作例)

従来、(4a)は「集合的」と「分配的」との2通りの解釈ができるとしている。それ

林 佩芬

に対し、(4b)は「分配的」な解釈、(4c)は「集合」的な解釈しかないとされている。すなわち、(4a)は「3人の学生からなるグループが3冊の本を買った」という解釈と、「3人の学生が1人ずつ3冊の本を買って、3人で買った本の総計は9冊だ」という解釈である。前者の解釈は、「3人の学生」を「集合的」と捉えた解釈であって、後者は、「3人の学生」を「分配的」と捉えた解釈である。また、宇都宮(2001)も以下のように説明している。

- (5) a. 3名の登山者がテントを張った。 (宇都宮2001:121)  
b. 登山者3名がテントを張った。 (宇都宮2001:120)

宇都宮(2001)は、(5a)の3名は、テントを別々に張ったのか一緒に張ったのかは、前後文脈がない場合には分からないと説明している。それに対し、(5b)の3名は「一致協力してテントを張った」と説明している。

また、川添(1996)は、「NQC型」における集合的な解釈を明示している。

- (6) a. 2人の友人が子供を1人産んでいる。  
b. 友人が2人、子供を1人産んでいる。 ((2)再掲)  
c. \* 友人2人が子供を1人産んでいる。 (川添1996:57)

川添(1996)は、(6c)は非文と判断している。そして、この非文判断を「NQC型」が分配的には解釈できないからであると主張している。

川添、宇都宮の主張は以上の通りであるが、(5b)の3人は、別々に3つのテントを張ったという解釈も可能である。また、(6c)は適当な文脈がある場合、自然な表現として成立するため、(6c)を非文と断定するのは妥当ではない。

さらに(7)のように、「NQC型」が分配的と捉えられる用例もある。

- (7) 決闘の勝敗の次第をお知らせする前に、この女ふたりが拳銃を構えて対峙した可憐陰惨、また奇妙でもある光景を、白樺の幹の蔭にうずくまって見ている、れいの下等の芸術家の心懐に就いて考えてみたいと思いません。 (『女』)

従来「NQC型」は集合的と考えられてきた。仮にその解釈に従うと、(7)は「この女ふたりが同じ一丁の拳銃を持つ」という解釈になる。しかし、(7)は「この女ふ

たりがそれぞれ一丁の拳銃を持つ」意味である。従って、「NQC型」は必ずしも集合的になるとは限らず、分配的な解釈も可能である。また、(7)は、「対峙する」という動詞が、このふたりの女の一人一人のことについて述べていると解釈されるため分配的な意味であると考えられる。次の例文も下線の部分は「集合的」ではなく「分配的」である。

- (8) 六年まえの初秋に、百円持って友人三人を誘って湯河原温泉に遊びに行き、そうして私たち4人は、それぞれ殺し合うほどの喧嘩をしたり、泣いたり、笑って仲直りしたときのことを書くつもりであったのだが、いやになった。(『俗』)

(8)は、「それぞれ」の表現から、「殺し合う」という動詞は、(私たち)4人の一人一人について言及しているため、同様に、「分配的」な意味に解釈できる。

#### 4. 同格数量詞

奥津(1969)が、「NQC型」を同格構造として分析して以来、一般に、「NQC型」の数量詞は同格数量詞と呼ばれるようになった。奥津(1969)は、同格構造「本3冊」は「本」と「3冊」という二つの名詞からなる名詞句とし、「本」は、示される対象物のいわば質的側面を表し、「3冊」はその対象物の数量の側面を表すとしている。奥津は、この二つの名詞はどちらも同一物を指示する名詞であり、意味上も同格であると説明している。

同格の観点から、「鉛筆3本を削った」の文を分析してみる。

- (a) 鉛筆を削った。----- (削った鉛筆の数は3本だ)  
(b) (前提：削られた対象物は鉛筆だ)----- 3本を削った。

(a)と(b)の二つの側面を結合して、意味的に(c)となる。

- (c) 鉛筆(を)3本(を)削った  
(c1) 形式1 鉛筆3本を削った。  
(c2) 形式2 鉛筆を3本削った。

(c)は(c1)と(c2)の二つの形式であらわされることから、(c1)と(c2)は類似する性質をもつと考えられる。同様に、「学生3人が来た」と「学生が3人来た」も類似表現である。「学生3人が来た」と「学生が3人来た」の場合、数量詞(3人)が、「学生がきた」(できごと)を意味する主体の人数と、「学生」そのものの数を同時に表現する。このことから、「NQC型」の数量詞は、「NCQ型」の数量詞と同様に、名詞と副詞の両方の性質をもっていると考えられる。つまり、「NQC型」(学生3人が)の数量詞は、名詞の同格を意味する以外に、副詞的な役割を持つことにもなる。この副詞的な性質をもつということは、「NQC型」と「NCQ型」が類似の性質をもつことになるため、「NQC型」も「NCQ型」と同様に、「分配的」な捉え方が存在すると考えられる。この点については次節で詳細に分析する。

これまで、「NQC型」は同格構造であると論じられてきたが、「NQC型」は、同格と非同格に解釈できる場合があると考え。ここでは、非同格解釈の例文として、「状態解釈」と「否定対極」の二つの場合を取り上げ、同格と異なる性質における「集合」と「分散」との関係进行分析する。

まず、ひとつは、「数量詞+で」、「数量詞+きり」のような「状態」を意味する場合、あるいはそれに相当する意味解釈が成立する場合について論じる。

- (9) a. \*土用の丑には、6人の家族でうなぎを食べに出掛けた。  
b. ?土用の丑には、家族が6人でうなぎを食べに出掛けた。  
c. 土用の丑には、家族6人でうなぎを食べに出掛けた。 (作例)

(10)【場面：エアベットの使用説明】

単一電池4本で約40回使用

([www1.kcn.ne.jp/\\_sankeitu/page015.htm](http://www1.kcn.ne.jp/_sankeitu/page015.htm))

(9)の「で」は、動作を行う主体としての団体の状態をあらわす。したがって、(9c)の「家族6人で」はその成員の一人一人ではなく、6人の成員からなる集まりであって、成員の全体のことを示している。「6人」は「家族」の全員数と同格であるが、この場合には、「家族」の「同格」と解釈するより、「出掛けた」ときの「状態」つまり「6人一緒に」出掛けたという状態と解釈するほうが妥当と考える。また、(10)の「単一電池4本で」も、4本がセットで使用されるという条件下で40回使用できるという意味であり、電池一本ごとにエアベットを40回使用できるということでは

ない。それゆえ、「単一電池」と「4本」との関係は「同格」と解するより、40回使用が成立するときの「状態」と解するほうが妥当である。次に、「で」格がなくても、「で」格を意味する例文を以下に挙げる。

- (11) もっとも蜜柑4個が十円のこのごろ、一冊15円の本はきわめて安い。  
(『茶』)

この文は、数量詞「4個」を省くと、「蜜柑が(ひとつ)10円」の意味になる。それは、(11)の知的意味と異なる。(11)は「蜜柑が4個で10円」の意味解釈であるため、この場合の「4個」は10円で買える蜜柑の(数の)状態と考えられる。

- (12) 「ゆうべいたのは、ここにいるおまえら4人きりか」  
「いいえ、六人でござりました」  
(『右』)

(12)の「4人」は「おまえら」の同格とみなされているが、同時に「昨夜その場にいた人数」の「状態」も意味する。(12)の「きり」は、その前に置かれている数量詞の重要度を際立たせている。そして、「4人きりかどうか」は発話全体の焦点として注目されるため、「4人」は単に名詞の同格と解釈するより、「きり」を後接して述部(動詞)の状態を説明していると捉えられる。

以上、(9)、(10)、(11)、(12)の例文は「状態解釈」と捉えることができる。この「状態解釈」には、数量詞を「各状態の数量の全体」として捉えることが必須条件であるため、「分配的」な解釈は難しい。それゆえ、「NQC型」が「状態」解釈である場合には、「NQC型」は「集合的」であることになる。

いまひとつは、「トンボ一匹いない」のような「NQ(ハダカ格)型」の否定対極の意味をもつ場合、「トンボ一匹」は同格と異なる役割をもつことが考えられる。ここでいう「NQ(ハダカ格)型」とは、「名詞、数量詞、動詞」という語順で、尚且つ、格(助詞)がない表現のことを指す。以下の(13a)はその例文である。

- (13) a 昆虫採集に行ったが、トンボ一匹採れなかった。  
b 昆虫採集にいったが、一匹のトンボもとれなかった。  
(水野1993 : 39)

「NQ(ハダカ格)型」における否定対極について、水野(1993)は以下のように述

林 佩芬

べている。水野(1993)は、(13a)はトンボ以外の昆虫全般が採れなかったことを含意するが、(13b)にはこの含意は認められないと述べ、「N+一+助数詞」(トンボ一匹)は名詞部分の指示対象(トンボ)を越えて、何らかの一般類が否定スコープ内に収まるというニュアンスを持つとしている。

このような「N+一+助数詞...ない」における数量詞(一匹)は、同類(昆虫)の中での最も典型的なものとして捉えられ、同類一般と説明することも可能であるため、同格構造と異なる性質をもつと考えられる。この場合の数量詞の意味を同類一般と解釈することは、複数のものの集合全体について述べることになる。従って、この場合は、「集合的」な解釈しか成立しないことになる。

## 5. 「NQ(ハダカ格)型」

4節では、「NQC型」における「同格」と「非同格」について述べた。本節では、同格性をもつ数量詞表現を「集合」と「分配」の観点から分析する。これについて説明するため、まず「NQ(ハダカ格)型」の例文をみってみる。

- (14) 波田は、シチャードへ、ミルク 1 罐と、卵10個分けてもらえないかと交渉した。 (『海』)
- (15) a. もう帰りの切符 3 枚買った。 (『土』)
- (16) a. 貴方のアルバムのお葉書17枚ございましたが、お約束でもしてあるように、こんどは何々の何月号に何枚かきました。 (『茶』)

「NQ(ハダカ格)型」のこれらの例には、潜在的な格の存在がある。(14)、(15a)には、「を」格が、(16)には、「が」格が存在する。この潜在的な格を文に補ってみると、その位置は二つ考えられる。

- (15) b. もう帰りの切符を3枚買った。  
c. もう帰りの切符 3 枚を買った。
- (16) b. 貴方のアルバムのお葉書が17枚ございましたが、お約束でもしてあるように、こんどは何々の何月号に何枚かきました。  
c. 貴方のアルバムのお葉書17枚がございましたが、お約束でもしてあ

るように、こんどは何々の何月号に何枚かきました。

「切符3枚買った」の文を「切符を3枚買った」と「切符3枚を買った」の二通りの文で表現できるということは、この3つの文の間に、類似している性質があるからであると考えられる。次の「NQC型」と「NCQ型」の例文もみてみよう。

- (17) a. 昨日学生5人が先生の家に来た。 (主語)  
b. 昨日学生が5人先生の家に来た。
- (18) a. 田中さんには子供3人がある。 (目的語)  
b. 田中さんには子供が3人ある。
- (19) a. 太郎は毎日コーヒー5杯を飲む (目的語)  
b. 太郎は毎日コーヒーを5杯飲む

(奥津1993 : 119)

奥津(1993)は、同格構造における数量詞が主語あるいは目的語である場合、「NQC型」と「NCQ型」の事柄的意味(知的意味)は同じであると述べている。このことから、(17a)は、「先生の家を訪ねてきた学生は、ひとつグループの状態できた」という集合的な解釈以外に、(17b)と同様に、「ひとりひとり、異なる時間帯きた」という分配的な解釈も考えられる。また、(19a)も同様に、一日に飲む5杯のコーヒーは、総計5杯という集合的な解釈以外に、一杯ずつ数えるという分配的な解釈も考えられる。

以上のことから、数量詞は名詞の同格と捉えられ、かつ主語或は目的語としてあらわされる場合、「分配」的な意味解釈が成立する。

## 6. おわりに

本稿は、「NQC型」における「集合」と「分配」について考察してきた。その結果は次のようにまとめられる。

1. 「NQC型」の数量詞は名詞と同格であって、かつ主語或いは目的語としてあら

林 佩芬

わされるという条件下で、副詞的な性質を持つこととなる。副詞的な性質をもつ場合、「NQC型」の数量詞は「分配的」な解釈になる。それゆえ、「NQC型」は「集会的」な解釈だけではなく、「分配的」な解釈も成立する。

2. 「NQC型」には「同格」と「非同格」的な意味解釈がある。同格解釈と非同格解釈は文の性質によって、「NQC型」における「集会的」と「分配的」な意味解釈の捉え方が左右される。
3. 数量詞は「非同格」の「状態解釈」、「否定対極」と捉えた場合、「NQC型」は「集会的」な解釈しか成立しない。
4. 「NQ(ハダカ格)」の否定対極表現は、「NQC型」の「集会的」な解釈と密接な関係がある。
5. 数量詞表現が「集会的」であるか「分配的」であるかを判断する場合、数量詞と名詞との語順関係だけを考えるのではなく、数量と述語との相関関係も考慮しなければならない。

#### 《引用文献》

- 宇都宮裕章(1995)「数量詞の機能と遊離条件」『共立国際文化』第7号共立女子大学 pp. 1-27
- (2001)『数えることば 数えることをめぐる認識と日本語』日本図書刊行会
- 奥津敬一郎(1969)「数量的表現の文法」『日本語教育』14号10月 日本語教育学会 pp. 42-60
- (1983)「数量詞移動再論」『東京都立大学人文学部人文学報』第160号 東京都立大学 pp. 1-24
- (1993)「名詞句からの移動と文法関係」『神田外語大学紀要』第5号 神田外語大学 pp. 111-130
- 川添 愛(1996)「日本語の数量詞の統語的位置と意味との相関」『九州大学言語研究室報告』第17号 九州大学 pp. 47-65
- 水野マリ子(1993)「否定対極のメカニズム『魚一匹いない』と『一匹の魚もいない』」『留学生センター紀要』神戸大学 pp. 39-45

《例文出典》

- 『茶』：『茶漉』日本語用例・コロケーション抽出システム（一般公開版）
- 『女』：『女の決闘』太宰治
- 『俗』：『俗天使』太宰治
- 『右』：『右門捕物帖首つり五人男』佐々木味津三
- 『海』：『海に生くる人々』葉山嘉樹
- 『土』：『土曜夫人』織田作之

